

「鎖国論」と「阿羅祭亜来歴」

の読書痕跡を追って

— 国立台湾大学長沢文庫訪書記 —

大島 明秀

はじめに

件の「平成二十八年熊本地震」が起こる約一ヶ月前、三月二〇日から二二日にかけて、年休を利用し台湾に飛んだ。目的は国立台湾大学での志筑忠雄関連資料の調査であった。以下その概要を簡単に報告したい。

一、国立台湾大学総図書館

国立台湾大学は、旧日本統治時代の台北帝国大学をそのルーツとする。第二次大戦後は、中華民国が接收し、この名前に改称して現在に至る。

雰囲気のある正門をくぐり、大学の主要道である「椰林大道」に出ると、両側に旧帝大時代の赤煉瓦造り、バロック様式の建物が見える。

お目当ての総図書館であるが、手元の地図には「椰林大道」に出て少し進んだところの左側に位置していることになっているが、これは古い情報で、目下この旧総図書館の建物には校史館が入っている。



図1 正門



図2 現在の総図書館

「椰林大道」を突き当りまで行くと、両側に椰子並木を備えたまま一面に芝生が広がるスペースに出るが、新総図書館はその向こうに所在している。

鉄筋コンクリート造り、五階建て。新しい施設であるものの、他の建物に調和するよう、褐色のタイルを貼り、大きな玄関ポーチを備えている。

威厳のある外観、主要道の最奥に鎮座する配置とそこに至る景観などから、国立台湾大学はこの図書館を「知」の総体として捉えているであろうこと、そしてそれをいかに尊重しているかが伝わってくる。

二、調査した資料

受付でパスポートを提示し、各種入館手続きを済ませ五階の珍藏室へ向かう。ここには近世後期の国学者で、類題和歌集をはじめとした文芸活動に精力を注いだ傍ら、至る資料で排外的発言を唱えた紀州和歌山藩士・長沢伴雄（二八〇八～五九）の関係資料が収められている。高橋昌彦氏が中心となって作成した目録の解題によれば、昭和七年二月に台北帝国大学が古書肆・杉本梁江堂から買い上げたコレクションで、受入当時は五〇五点一、二六九冊を数えていたが、最近の調査では八二三点一、六〇〇冊が確認されている¹⁾。

その中から、今回は事前に長沢自筆本の「時世論」と、志筑忠雄訳「阿羅祭垂来歴」の転写本と目される「文化甲子魯西亜国王呈和文之上書 文化甲子魯西亜国横文和解傍釈²⁾」という二写本の閲覧を予約している。

珍藏室は小展示もありなかなか楽しめる空間であるが、他の閲覧者が不在で静寂が広がっていた。ここを管轄している職員の林雅恵さんと通訳に当たってくれた学生は非常に丁寧かつ親切な対応をしてくださったものの、「撮影禁止で、三枚まで複写のみ可」、という館の方針は外国から来た身としては非常に厳しい。とにかく限られた時間で筆記・転写あるのみ。

（一）「時世論」

本資料にケンペル原著、志筑忠雄訳「鎖国論」を典拠とした発言が認められることは、実は随分以前に川平敏文氏より御教示いただいていた。「時世論」は嘉永二年（二八四九）七月に成された長沢伴雄の自筆稿本で、書籍解題には「中国・朝鮮、あるいは阿蘭陀などと比較して、日本は自給自足可能な国であるとし、鎖国を推し進めて交易通商を拒むべきことを説いたもの³⁾」と説明されている。

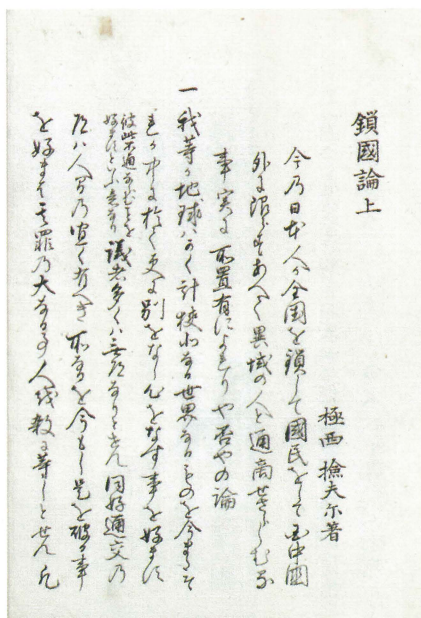


図3 「鎖国論」の内題（架蔵）

ところで筆者は、嘉永七年（一八五四）四月序「神風挫夷軍談」巻一「大日本国ハ世界万国の冠国たる事」において、長沢伴雄が「鎖国論」を利用していることについて論じたことがある。該当記述は左の通り。

かにかくに稲穀ハ皇国に所生を以て世界第一と為る事なりというに愉快くめてたき事ならずや。その他に金銀、銅鉄、材木、繭糸、紙漆、器物にいたるまで其物々の凡庸ならざる、加之人民の性質剛直にて義勇に厚き事また宇宙第一の冠国なるよしは、既に阿蘭陀人検尔夫か日本志に悉しく称へ羨たるにても知られた。如此世に秀れて美国なるは、上に云へることく神聖の本津御国なればそかし「…」阿蘭陀人検尔夫か大日本を称讚羨たる事とは、志筑忠雄か鎖国論、また菅井淡山か紅毛地志訳言に見えたり⁴

加えて、長沢は「神風挫夷軍談」と同時期に編んだと見られる「挫夷本論」でも同趣の発言を行っている。本の至る所で「鎖国論」に基づいた記述が認められるが、ここでは特に象徴的な箇所を引いておこう。

扨如件富饒堅固の国法を夷虜ともハ鎖国と号け、人心偏小にて狭政なりと誹る事とぞ。其は和蘭人検尔夫か鎖国論【この書は検尔夫か著したる日本志の中より鑒要の論説ともを抜粹して長崎人志筑忠雄か翻訳せる書なり】、又紅毛地理志訳言【こは江戸人菅井淡山か翻

訳書なり】などに件の趣を委しく記して甚く賞美したるをも思ふへし。彼等も実は己れか国をも 皇国の如く鎖国の良法を建まほしきなめれと、彼国ハ元より他邦に通商交易せずては立かたき国体なるか故に止事を得ず然か有なり⁵

以上のように、長沢は「鎖国論」を万国における日本の優位性を説くための典拠として用いているが、これは既に平田派の国学者間で古典化されていた利用法であり、言い換えれば日本の優秀性を唱える際の常套手段であった。それでは両資料に先駆けて嘉永二年（一八四九）七月に著した「時世論」ではいかなる利用法が認められるのだろうか。

さて如□富饒堅固の国法を夷虜ともハ鎖国と号け、人心偏小にて狭政なりと誹る事とぞ。其は和蘭人検尔夫か鎖国論【この書は検尔夫か著したる日本志の中より鑒要の論説ともを抜粹し、長崎志筑忠雄か翻訳せる書なり】また紅毛地理志訳言【こは江戸人菅井淡山か翻訳書也】などに件の趣を委しく記して甚く賞美したるをも思ふへし。彼等も実ハ己れか国をも 皇国の如く鎖国の良法を建まほしきなめれと、彼国はもとより他邦に通商交易せずてハ立かたき国体なるか故に止事を得

す然かあるなり。

仮名遣いや漢字の当て方、もしくは送り仮名に僅かな異同が見えるが、一瞥して分かるように、「挫夷本論」と同じ文章と言って差し支えないだろう。

ここで「時世論」が一五丁の小冊子である一方、およそ五年後に完成した「挫夷本論」は序・跋を抜いて五五丁に及ぶ冊子で、「神風挫夷軍談」に至っては六冊にわたる大部であることにも留意したい。

以上を勘案すると、「時世論」は、「挫夷本論」(「神風挫夷軍談」成立過程における前段階、つまりは草稿と位置づけることができ、嘉永二年七月の時点で、長沢伴雄は「鎖国論」をかように利用していたことが窺えるのである。

(二)「文化甲子魯西亜国王呈和文之上書 文化甲子魯西

亜国横文和解傍釈

当該資料は、志筑忠雄訳「阿羅祭亜来歴」に遡る作品を所収しており、現存する八点目の資料であることは以前拙稿で指摘したところである。ただし、その際資料は解題目録に基づいて書誌を記したが、再度左に書誌を掲げるにあたっては、実見した成果を反映させた⁷⁾。

台湾大学図書館(長沢文庫)

法量…二六・九×一八・二糎

形態…写本、一冊

紙数…一四丁(表紙を除く)

表記…漢字平仮名交じり文

外題…文化甲子魯西亜国王呈和文之上書 文化甲子魯

西亜国横文和解傍釈

内題…阿羅祭亜来歴

(志筑) 跋文の年記・署名…寛政七卯□月日 志筑忠

雄訳

大槻跋文の年記・署名…癸丑十月録

蔵書印記…なし

備考…前半は「阿羅祭亜来歴」、後半は文化元年

(一八〇四)にロシアから奉られた日本語書状

の写し

…巻末に識語「天保六乙未年「一八三五」五月廿

八日令写畢／同七月廿八日一校畢／長沢伴雄」

(朱) あり

…本資料は二跋文系統に位置づけられる。

…戦災焼失した礪川文庫旧蔵「魯西亜国王呈和文之上書／魯西亜人止白里併有来歴」と内容を同じくする資料か

先述の「時世論」、「神風挫夷軍談」、「挫夷本論」のように、長沢には異国に関する情報や同時代の対外関係を論じた著作があるが⁹、その情報源として、志筑忠雄の訳書の中であまり普及しなかった「阿羅祭亜来歴」まで入手していたことは興味深い¹⁰。

さて、資料は全体的に虫損がひどく、所々で判読できない箇所があるが、内容が分からなくなるほどではない。なお、後半の作品「文化甲子魯西亜国横文和解傍釈」は、文章の順序は前後するものの、文化三年（一八〇六）頃に大槻玄沢がロシア情報をまとめた「北辺探事」中の、レザーノフ（Nikolai Petrovich Rezanov）と持参した信牌をめぐる記述とほぼ一致しており、これに遡る資料と見てよいだろう¹¹。

また、「日本古典籍総合目録データベース」に志筑忠雄訳本として登録されている、礪川文庫旧蔵の「魯西亜国王皇国文之上書／魯西亜人止白里併有来歴」にも注目したい。当該本は戦災焼失し現存を見ないが、まず、前半の資料名が台湾本のそれとほぼ同じであること。次に、後半の資料名「魯西亜人止白里併有来歴」は間違いなく「阿羅祭亜来歴」に遡るものであること。この二点を勘案すると、礪川文庫旧蔵本と台湾本は同種の写本と見てよいだろう。ただし、礪川文庫旧蔵本が、台湾本の後半部分に該当する記述を備

えていたかどうかは不明である。

ときに、「阿羅祭亜来歴」は資料によって「魯西亜志附録」や「羅祭亜来歴」など異名が付されている場合があるが、台湾大学蔵本（以下、台湾本）の内題は、この資料の原題である「阿羅祭亜来歴」が付されている。さらに志筑忠雄と大槻玄沢の両跋文を有し、これまで調査した諸本のうち最も原型に近いと目される洲本本と同系統に属する。なお、文章を見ても、洲本本、台湾本ともに西暦一六八八年に「康熙二十五年」¹²と誤った注を付している点で特徴を同じくするなど一致点が数多く認められる。

ただし、洲本本の志筑跋文では、原著 François Valentyn『新旧東インド誌』¹³について、「フランソイスハレンティンが著せる」¹⁴と著者名の読みを正確に表記できているのに対し、台湾本では「フランソイスハレンティン」¹⁵と、格助詞の「が」を「グ」と読み違い、さらに人名の一部と捉えている¹⁶。ただ一方で、洲本本では、書写者が草書の「高」を読み誤って「馬」と理解し、カスピ海を「北馬海」と記述しているのに対し¹⁷、台湾本では「北高海」と正しく記されている。

さらにロシアの通貨単位ルーブルの注に至っては、オランダの旅行研究家ストロイス（Jan Jansen Struys）について、洲本本では「ストロイス」¹⁸といふ者と、格助詞「と」を人名の一部と誤っているのに対し、台湾本では「ストロイス

といふ者」と正確に記述している。しかし、オランダの通貨ギルダーについては、洲本本では「ギョルト」、「ギョルド」と表記しているのに対し、台湾本では「ギョル」と明らかに対応する音が不足している。

洲本本、台湾本ともに表記上の誤りが散見されることから、どちらがより原型に近い本であるかという問題についてはここでは即断できず、稿を改めて論じることとしたい。

おわりに

以上、台湾大学に所蔵されている「時世論」、「文化甲子魯西亜国王呈和文之上書 文化甲子魯西亜国横文和解傍釈」という二資料を通して、長沢伴雄の読書痕跡を手掛かりに、志筑忠雄作品の受容相を見てきた。

まず、「時世論」は、後年成立する「神風挫夷軍談」や「挫夷本論」の草稿と言える著述で、そこにおける志筑忠雄訳「鎖国論」の利用法は、「世界における日本の優秀性」を説くものであった。なお、かかる引き方は平田派の国学者間で古典化されていた方法であった。

次に、「文化甲子魯西亜国王呈和文之上書 文化甲子魯西亜国横文和解傍釈」には、「阿羅祭亜来歴」が所収されていた。台湾本は洲本本と同系統に属し、洲本本と並んで「阿羅祭亜来歴」の原型に近いものであることは疑いないものの、一方で表記上の誤りが散見された。

「時世論」における「鎖国論」利用法がある種予想できるものであったに対し、台湾本「阿羅祭亜来歴」が洲本本と並んで原型に近いものであったこと、加えて、その資料形態から、焼失した幻の礪川文庫旧蔵本の姿を浮かび上がらせたことは望外の収穫であった。

注

1 高橋昌彦主編『国立台湾大学図書館典藏「長題文庫」解題目録』（国立台湾大学図書館、二〇一三年）「解題」ix頁。なお、書名の繁体字は常用漢字に改めた。また、この間亀井森氏に様々な御教示をいただいている。記して謝意を表する。

2 以下、資料名や引用文は現在通用する字体に改めた。

3 前掲『国立台湾大学図書館典藏「長題文庫」解題目録』、二五七頁。

4 長沢伴雄「神風挫夷軍談」（嘉永七年四月中島広之序）、七丁表〜八丁表。底本は京都大学附属図書館蔵本を使用。原文を損なわぬよう關字は底本に従ったが、読者の便宜上引用文には句読点を付した。また、筆者による加筆は角括弧で示した。以下同。拙著『「鎖国」という言説―ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容

史―』(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)の第三章第二節参照。なお、拙著では国立国会図書館蔵本を利用したので引用文が異なっている。

- 5 長沢伴雄「挫夷本論」(安政元年冬大江延年跋)、三〇丁表裏。底本は京都大学附属図書館蔵本を使用。割注は墨付括弧によって示した。以下同。

- 6 長沢伴雄「時世論」(嘉永二年七月稿)、九丁表一〇丁表。底本は国立台湾大学図書館蔵本を使用。虫損は白四角によって示した。

- 7 拙稿「津市図書館稲垣文庫蔵「東砂葛記」について―志筑忠雄訳「阿羅祭垂来歴」の一転写本―」(『国文研究』第五九号、二〇一四年)、三頁を改訂した。

- 8 拙稿「志筑忠雄「阿羅祭垂来歴」の訳出とその書誌」(『雅俗』第一二号、二〇一三年)第三章第一節参照。

- 9 前掲『国立台湾大学図書館典蔵「長題文庫」解題目録』「解題」xi~xiii頁。

- 10 志筑のいわゆる政治三部作のうち「鎖国論」は普及したが、残る「阿羅祭垂来歴」と「二国会盟録」については、それほど転写本や受容の形跡は確認できない。拙稿「志筑忠雄とその言説」(『鳴滝紀要』第二五号)、九三頁。

- 11 大槻玄沢「北辺探事」(大友喜作編『北門叢書』第六冊、国書刊行会、一九七二年所収)。

- 12 本来は西暦一六八六年に相当。

- 13 François Valentyn: *Oud en nieuw Oost-Indiën. Te Dordrecht : By Joannes van Braam ; Te Amsterdam : By Gerard onder de Linden*, 1724-26.

- 14 傍線は筆者による。以下同。

- 15 「ラ」の右側に付された白丸圈点は、この「ラ」の字音が「で」ではなく「ら」であることを示している。

- 16 この点については、前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅祭垂来歴」の訳出とその書誌」、三九頁参照。

- 17 この点については、前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅祭垂来歴」の訳出とその書誌」、三九〜四〇頁で既に指摘した。見せケチは底本に従った。

- 18 【付記】「平成二十八年熊本地震」の直後、林雅恵さんから安否を気遣う連絡をいただいた。調査時のみならず帰国後も御温情に接したことを書き留めておく。